

[成果情報名] 露地抑制ナスのかいてき仕立て栽培

[要約] 露地抑制ナスで「かいてき仕立て栽培」で行う場合、主枝の仕立て本数を6本とし、緩効性被覆肥料を主体に窒素成分量40kg/10aを全量基肥施用することで、生育初期から効率よい肥効が得られ、8t/10a程度の上物収量を得ることができる。

[担当] 総農セ・栽培部・野菜科・赤池一彦

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 農業技術普及部、峡南地域普及センター

[背景・ねらい]

かいてき仕立て栽培による露地抑制ナスは複合経営の組み合わせ品目として有望であるが、栽培期間が短いため10a当たり収量は5t程度（2003年成績：N-32kg/10a）であり、栽培期間が2ヵ月長い夏秋ナスの10t程度（2003年成績：N-40kg/10a）と比べて収量性が劣る。そこで、収量性の向上と効率的な施肥法について検討し、露地抑制ナスの「かいてき仕立て栽培」技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 露地抑制ナスで「かいてき仕立て」（図1）を行う場合、施肥量を夏秋栽培と同量のN-40kg/10aとし、主枝の仕立て本数を6本とする（図2、図3）。側枝は花直上部を摘心しながら、収穫作業は切り戻しと同時に行う（2002年、2004年成果情報）。
2. 抑制ナスは生育期間は短いですが、生育初期から窒素を速やかに吸収するため、夏秋ナスと同等の窒素吸収量となる（図4）。
3. 施肥方法は、緩効性被覆肥料のロング100日タイプ（N-25kg/10a）とCDU化成（N-15kg/10a）を全量基肥施用とすることで、追肥は必要としない（図5）。

[成果の活用上の留意点]

1. キュウリ・インゲン支柱を用いた「かいてき仕立て」は、夏秋ナスでは主枝3本で3～4次側枝まで収穫するが、抑制ナスでは主枝6本で概ね2次側枝まで収穫する。
2. 施肥量は夏秋栽培と同量の窒素成分量40kg/10aを基準とし、これを越えないように留意する。

[期待される効果]

1. 栽培期間の短い抑制ナスの収量確保と効率的な施肥が両立できる。
2. 本県野菜の主要品目であるナスの安定生産に寄与できる。

[具体的データ]



図1 露地抑制ナスの「かいてき仕立て」栽培

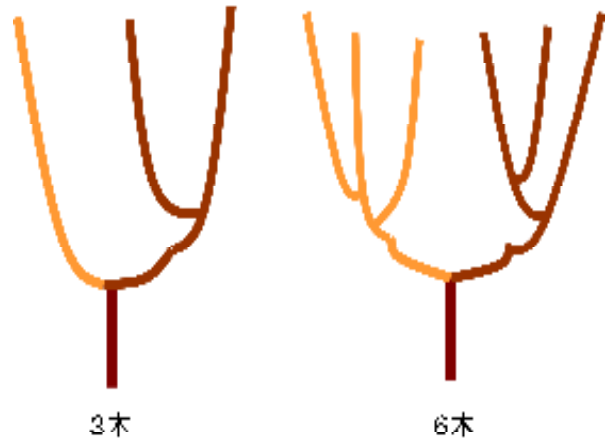


図2 主枝6本の誘引方法(右)

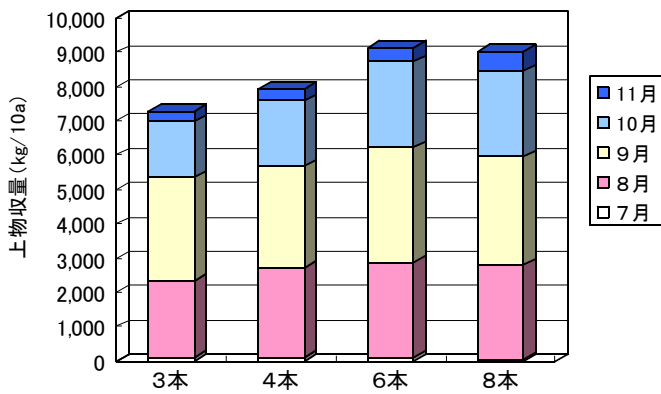


図3 仕立て本数の違いによる月別上物収量(2008年)
施肥量はN-40kg/10a

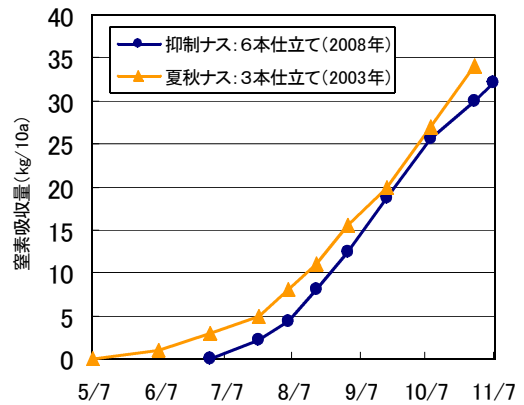


図4 露地ナスの窒素吸収量の推移
施肥量はN-40kg/10a

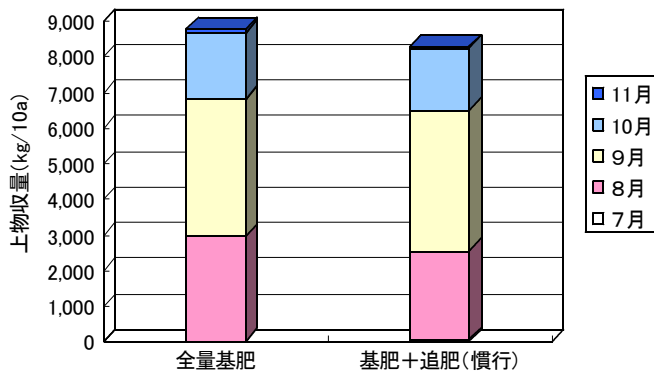


図5 施肥法の違いによる月別上物収量(2010年)
仕立て本数は主枝6本
施肥量はN-40kg/10a

[その他]

研究課題名：露地抑制ナスの「側枝更新剪定法」に適した栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：赤池一彦、長坂克彦、小澤明子、山崎修平、望月久美子、千野正章